



miho Hatanaka,

小学校で性教育の講師として話をし始めた頃、この授業のことを「いのちの授業」と呼んでいた。「こころとからだの性教育」というようになったのは、大学院で論文を書くようになり、ゼミで曖昧さを指摘されて言葉や定義を自分なりに問い直したという経緯がある。「こころとからだ」。それを考える授業での「いのち」の詩。今回も、二編を。



【第19話 いのちのうた 4 : こどものコトバ】

私の行う性教育では教材はなるべくリアルな体験に結びつくようにと考えており、自分の体と結び付けて捉えられるように工夫を重ねてきた。例えば妊婦の疑似体験用の“お腹”は3kgの米。教材用に販売されているシミュレーターもあるが、自身の4回の妊婦経験からも米のフィット感やリアルな体感にはなかなか及ばない。また米は大切な食べ物として命を感じさせるものであり、疑似体験とは言え粗末には扱わないものを用いたいという想いがあった。胎児の人形も自作して、その“体内”には川で拾った丸い石を納めた。こちらも市販の人形はどうも“かわいらしく”てリアルさに欠け、妊娠3か月と8か月の胎児人形の、顔の表情が同じなのはともかく、頭身が同じなのは違和感があった。遠方での授業で人形が持参できない時には細密に描いた絵を用意したり、実際の妊婦さんに授業に参加してもらった時には胎児の心音を聴いたりしたこともある。そのトコトコと小さく打つ心音に耳を澄ませた後、自分の心音とを聴き比べさせると、ゆったりと大きく打つ音に子どもたちは喜んだ。手の脈をとり、呼吸の度の胸やお腹の膨らみやへこみを感じ、手の冷たさや温かさを感じ、体を支える骨や子宮の収まる骨盤を触ってみて、自分の体と結びつける。性教育は「どこかの誰か」の話ではなく、「あなたのからだ」の話なのだ」とわかってもらえることが、最も大切なことかもしれない。

「いのち」

作：K 小学校 4 年生のみなさん

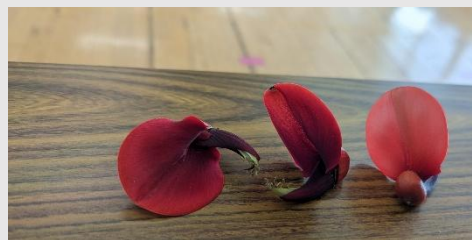
息をしていること
生きていること
家族といっしょにごはんを食べれること
友達といっしょに遊べること

「いのち」は、
人が生きていくための、体にたいせつな物
このよに必要な物

長生きする人は長く生きていく。(人生とおもう)
一生に一つの命
なくなると
二度と元にもどらない大切なもの
(しんぞう) うごかんくなったらしぬ。
だから大事にせないけん
「いのち」は、
一回しか使えないもの

自分
友達
動物
心
人間のいき
「いのち」は、
とうめいな色をしている

「いのち」は、
人間の弱点
神様がくれたしれん
人間がもっているもの
みんなにあるもの
生きるきぼう



Red-1

「いのち」

作：O小学校2年生のみなさん

いのちは、人をいきらせています。

それがいのちです。

いのちは大切です。いのちがなかったらしんでしまう。

いのちは、1こしかないから1回ころされたらもう、いきや、こきゅうもできなくなる。

なくなってしまったらしぬから、

からだのなかにないと、いけないものとおもいます。

自分のいのちは、生きてるためのいのち。

じぶんが生きるためのどうぐみたいなもの

いのちは、むねにある。

あるいたりすると いのちがドキドキしていると思いうかべます。

いのちはからだのエンジンみたいなものです。

いのちはたいせつなもの。

ものすごくだいじな、 体からまもられているようなもの

そして、

自分の大せつなものを

まもってくれるもの。

いのちは、人のだいじなうんめい。

ひとをたすけるもの。

二さいになってどうろにでていたら、たすける。

いのちをだいじにする人に

やさしさがくると思いました。

いのちは、うまれるもの

3ばん目の赤ちゃん

1人に1つしかないもの

生まれて一ばんせいちょうするもの。

いのちは、じぶんじしん。

だいじな心

いきる力

自分が生きるためのお母さんがくれた、

たからもののようなもの



Red-2